我が家の日本の母

アブドゥル・ワヒード

Abdul Waheed
出身地：パキスタン
所属：カラチ大学
日本滞在: 2009年4月～10月

今回は二度目の日本滞在になる。前回は家族と名古屋に五年間滞在した。初来日したときは家族皆、孤独感を味わった。名古屋の街を歩きながらもお年寄りの顔に我々の両親の面影を求めていた。時が経ち私も妻も父親を亡くした。滞在五年目に引っ越しをした。そのマンションに年の頃七〇ぐらいの女性が私たちの世話を焼いてくれた。彼女の顔に実の母の面影を見いだした。我々は彼女が日本での母のように思えた。彼女のふるまいを見ると、彼女もともに暮らす家族をさがしている風なのだ。旦那が亡くなってから七年も一人暮らしを続けてきた。二、三日一緒にいて、彼女は私にとってとても親切な母、家内には義理の母、そして息子達には祖母（おばあちゃん）に出会ったような気持ちになった。毎日部屋でテーブルを囲んで、話をするようになった。名古屋のいろいろなところを一緒に訪れた。彼女をのぞき皆外国人なので街で会う人は我々を見てびっくりした様子だった。我々の関係を尋ねてくる人もいた。そういうときはいつも「この人は私の息子でこの子らは孫なのよ」、と彼女は誇らしげに答えたものだ。我々にもうひとり赤ん坊が誕生したときも孫が三人になったといって非常に喜んでくれた。妻が入院している間、二人の息子のために料理を作ったり日本の昔話を聞かせてくれたり組み立ておもちゃなどで部屋で遊んでくれた。うまれた赤ん坊もおばあちゃんになつき、抱っこされるととても喜んだ。おばあちゃんの誕生日は、私たちのアパートでお祝いをすることにした。贈り物を買い、家内はパキスタンのお菓子と料理を作った。部屋に招き入れるととてもおどろいた様子だった。自分の誕生日を覚えていてお祝いしてくれたことがとても嬉しかったようだ。ケーキを切っているとき、彼女が目に涙をためているのがわかった。日本の生活でこの日は彼女にとっても私の家族にとっても一番幸せな日であった。

パキスタンに帰ったあとも電話で連絡をとりあった。子ども達もビデオや写真をながめ続けた。そのうち親戚や友達の間でも彼女は有名になってしまった。二年後、アジ研の客員研究員になる機会を得られたと知ったとき、即座に日本の母にまた六ヶ月滞在できることを伝えた。このニュースに彼女は喜んだ。あと何日すれば日本にいけるかを指折り数えた。そしてまた日本にやってきた。でも、今度は名古屋でなく千葉である。来た日にすぐ電話し住所を伝えた。ゴールデンウィーク中に千葉に来るとのこと。連休初日にアパートで再会した。孫達（特に一番下の子）が大きくなったのに驚いていた。かれらは一目見るなりそれがおばあちゃんであるとわかったようだ。彼女は孫達に声をかけたが、彼らは日本語を忘れてしまっていた。この光景はちょっと奇妙なものだった。おばあちゃんと孫達は、かつてはなんでも話し合えた仲だったのに、今は言葉ではなく気持ちだけで通じ合っているのだ。日本の母は、四日間我々が彼女のために用意した部屋に泊まった。昼間は千葉や東京の見物をし、夜はくつろいで遅くまでおしゃべりに興じた。四日間はあっという間に過ぎ去り、連休の終わりに名古屋にもどっていった。いまでも三、四日おきに、ときには毎日電話で話している。母国の実の母もふくめ家族全員が日本の母のことは知っているし、おばあちゃんも我々一同のことを知っている。双方合って話がしたいと思っている。難しいことかもしれないが、できないことではないと信じている。

（海外客員研究員／訳　真田孝之）

おばあちゃん（中央）と一緒に（幕張にて）